

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 28 日現在

機関番号：64303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770247

研究課題名(和文) 日本近世近代移行期における内水面漁業の研究 - 琵琶湖を対象に -

研究課題名(英文) Fishery management in a fresh water lake of Biwa-the transition from the early modern period to the present-

研究代表者

鎌谷 かおる (KAMATANI, kaoru)

総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員

研究者番号：20532899

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、具体的に以下の2つの課題に取り組んだ。1、琵琶湖漁業の「近世」から「近代」への質的变化の分析、2、明治初期における琵琶湖漁業の担い手についての具体的分析。1では、滋賀県内の各研究機関に所蔵されている漁業関連史料の収集・調査・分析をおこなった。これらの史料は、琵琶湖漁業研究の基礎資料となるものであり、史料集の刊本化を目指し準備をすすめている。2では、明治期の養魚技術発展に貢献した中川源吾に焦点をあて分析をおこなった。その成果の一部として『明治・大正期中川源吾をめぐる史料と地域社会』と題した報告書を刊行した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we evaluated how fishery management in the Lake of Biwa changed from the early modern period to the present day, and carried out a survey of fishermen in the early Meiji period. Regarding the former, we collected a wide range of relevant historical documents stored in several institutes of Shiga Prefecture. These collected documents will be published as a reference book in the future. Regarding the latter, we analyzed how fisheries developed in this region, especially focusing on Mr. Gengo Nakagawa, who significantly contributed to the technological advance of fish farming. Finally, we published a report based on historical documents relevant to Mr. Gengo Nakagawa.

研究分野：日本史

キーワード：日本史 近世史 琵琶湖 漁業

1. 研究開始当初の背景

本研究に関連する近世の漁業史研究は、1990年代以降、共通する議論を見だし、漁業構造の全国的把握、漁業史という枠を超えて近世史研究の中に広く漁業を位置づけることを目的に研究蓄積がなされてきた。中でも、漁場請負制の研究、漁業政策の研究によって、漁場利用あり方や領主支配との関係などが解明された。

[主要な研究史]

高橋美貴氏「近世における漁場請負制と漁業構造 - 越後国岩船郡村上町鮭川を事例として -」後藤雅知・吉田伸之編『水産の社会史』山川出版 2002年、東幸代氏「丹後宮津藩政と漁獲物流通 - 近世後期の魚肥問題を中心に -」『同上』、後藤雅知氏『近世漁業社会構造の研究』山川出版社 2001年等)

これらの成果により、漁業史研究には分厚い蓄積ができ、共通する特質や全国的な体系だった構造を提示できうる段階まで押し上げられつつあると評価できる。

しかし一方で、地域によって異なる特質を共通の問題として捉えるための議論や、漁業とそれに関わる実態(漁獲物・漁業技術等)について研究が行われはじめているが(例えば、高橋美貴「俵物増産と海士集団の出漁 - 佐渡国海士町海士を事例として -」『歴史』2009年、同「近世漁業を通してみた生業と魚介類」中澤克昭編『人と動物の日本史2』吉川弘文館 2009年等がある。)未だ検討の余地がある。それらの解明なくしては、近世漁業の全国的体系を示すことは難しいことも事実である。

さて、研究代表者は、これまで日本近世の漁業権のあり方について、琵琶湖の漁業社会の解明も含め研究をおこなってきた(科学研究費補助金(若手研究(B))「日本近世における内水面の漁業権に関する基礎的研究」課題番号21720246)。それは、従来の漁業史研究が海域中心であるのに対し、内水面漁業を分析することにより、違う論点を見いだす可能性があると考えたからである。

具体的には、琵琶湖漁業社会の秩序形成や、湖上支配についての各領主の見解、そしてそれを漁民自体がどのように理解・認識していたのかを、数多の争論史料を用いて検討した。その結果、近世琵琶湖の漁業社会の秩序形成は、単に領主支配に対応する形であったのではなく、近世以前の慣習や由緒にも影響される複雑な社会であったこと、湖上の権利の理解のしかたや、漁業権確定への関与のしかたは領主によって様々であったこと、争論が繰り返される中で、漁民自体が、漁場所所有の権利の主張の拠として、領主の主張を巧みに利用していたことなど、琵琶湖における近世漁業社会の実態を解明しつつある。

ただ、その漁業社会が近世から近代へと時代が移り変わる中で、どのような質的变化を遂げたかについては、未だ検討に至っていない。

い。しかし、その質的变化の内容を丹念に検討してみると、近世琵琶湖の漁業社会、ひいては先にあげた漁業史研究全体の課題や、近世の漁業構造を明らかにできうるのではないだろうか。

また、研究代表者は、マキノ町知内区の古文書について、共同研究者とともに長年研究をおこなっている。

近年は、知内区出身の中川源吾についても研究をおこなっており、作業をすすめていくなかで、琵琶湖漁業の近代化における中川源吾の果たした役割の大きさを知ることとなった。

そこで、中川源吾の業績を踏まえつつ、琵琶湖漁業の近世から近代にかけての長期間の質的な変化を丁寧に整理し、「約400年の琵琶湖漁業史」を提示できるような研究をおこないたいと思った。

以上が、本研究を着想するに至った経緯と背景である。

2. 研究の目的

本研究は、日本近世の内水面漁業を対象に、漁業権・漁法・技術・漁民の知識が近世近代移行期にいかなる質的变化を遂げたのかを分析しようとするものである。

明治初期、近世において公権力によって設定された漁業権が解体されていくなかで、各漁村では新たな漁業権の獲得を試みている。全国均一な漁業法が確定されるまでの当該期の漁村における漁業の担い手の存在、近世漁業の慣習を継続させるための試み、漁民の「知」と技術の向上、等々の具体的な分析を通じて、近世の内水面漁業の到達点と近代への展開を探る。

また、これまで日本史以外の分野の研究者とともに共同研究をおこなってきた研究代表者の学術的特色を活かし、本研究では、現代史までの長いスパンのなかに「近世史」を位置づける、より広い経験科学のなかに「歴史学」を位置づける、地域における「近代化」を生業の観点から読み直す、という3つの目的も視野に入れている。

3. 研究の方法

本研究の基本的な方法は、以下の2点である。

滋賀県内の各研究機関に所蔵されている近世・近代の漁業史料について、漁業権・漁業技術・漁法・漁民の「知」という視角による再検討

集中的にひとつの地域(知内区)におけるインテンシブな現地調査

具体的には、以下の2つのステージで構成している。

a) 琵琶湖漁業の「近世」から「近代」への質的变化の分析

琵琶湖の漁業権に関する基礎的研究を進展させる形で、あらたな視角 - 漁業技術・漁民の「知」 - を取り入れながら、琵琶湖漁業の具体的な質的变化を捉える

b) 明治初期における琵琶湖漁業の担い手についての具体的な分析

中川家文書の調査・研究
中川源吾の業績に関する古文書調査
養魚技術伝播に関する古文書調査
中川源吾の業績に関する聞き取り調査
養魚技術伝播に関する研究史の整理
琵琶湖漁村の古文書調査

4. 研究成果

a) 琵琶湖漁業史料の収集と基礎資料作り

本研究では、滋賀県内の各研究機関に所蔵されている漁業関連史料の収集・調査・分析をおこなった。

これらの史料は、琵琶湖漁業研究の基礎資料となるものであり、史料集の刊本化を目指し準備をすすめている。複数の機関に所蔵されている古文書を、解読し、一冊に手にとって見ることが可能になれば、今後漁業の歴史を研究する人が増えることにもつながり、結果として研究が活発になることが大いに期待できる。そのためには、残存している漁業史料を徹底的に網羅し調査をする必要がある。

なお、本研究期間中に把握しきれていない古文書の調査についても継続しておこない、上記の史料集作成の準備にそなえたい。

b) 中川源吾研究

明治期の養魚技術発展に貢献し、「琵琶湖水産翁」と呼ばれた中川源吾に焦点をあて、分析をおこなった。具体的には、下記の作業を実施した。

- ・ 中川家文書の調査
整理 / 写真撮影 / 目録作成
- ・ 中川源吾の業績の調査
滋賀県水産試験場所蔵文書調査
鹿児島県に残存する漁業史料の調査
- ・ 養魚技術伝播についての調査
鹿児島県内での聞き取り調査
- ・ 中川源吾と地域社会をめぐる調査
知内区有古文書の調査 / 研究

これらの研究成果の一部として『明治・大正期中の川源吾をめぐる史料と地域社会』(鎌谷かおる 高橋大樹編 2017)と題した報告書を刊行した。

中川源吾研究は、今後さらに史料の整理や分析を深め、報告書に数本の論文を加えて、書籍化することを計画している。

c) 研究成果の還元

中川家文書の調査では、漁業に関すること以外に、中川源吾が地域で果たした役割について解明することができた。とりわけ、源吾はみずからの旦那寺の寺史について興味を持っており、書き留めた書類も多く残存している。共同研究者の高橋大樹はそれらの史料に注目し、分析をおこなった。その成果は、上記の報告書『明治・大正期中の川源吾をめぐる史料と地域社会』に収録するとともに、源吾の旦那寺で現在の檀家の方々の前で研究報告をおこなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

鎌谷かおる、中川源吾と水上助三郎 日本漁業の「近代化」を支えた二人、
Humanity&Nature Newsletter、査読無、No.55、2015、p13

鎌谷かおる 佐野雅規 中塚武、日本近世における「年貢」上納と気候変動-近世史研究における古気候データ活用の可能性をさぐる-、日本史研究、査読無、No.645、2016、pp.36-56

鎌谷かおる、近世村落史料調査試論-近江国をフィールドワークする-、新しい歴史学のために、査読無、No.289、2016、pp.56-66

〔学会発表〕(計1件)

鎌谷かおる、日本近世における「年貢」上納と気候変動、日本史研究会例会、2015、

〔図書〕(計1件)

鎌谷かおる 高橋大樹、科学研究費助成事業若手研究(B)研究課題「日本近世近代移行期における内水面漁業の研究 - 琵琶湖を対象に」報告書「明治・大正期中の川源吾をめぐる史料と地域社会」、2017、228

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鎌谷かおる (KAMATANI kaoru)

総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員
研究者番号：20532899

(2)研究分担者
なし
研究者番号：

(3)連携研究者
なし
研究者番号：

(4)研究協力者
高橋大樹 (TAKAHASHI hiroki)
郡山志保 (KORIYAMA shiho)
柿本雅美 (KAKIMOTO masami)